報告

日田虫送り考

高倉芳男

一、はじめに
二、虫おくり
1 虫　2 虫おくりの呼称　3 虫おくりの話者　4 時刻　5 集合・進路・追い落し・追い上げ　6 炬火　7 人形　8 鳴りもの　9 囃し言葉　10 虫おくりの実施　11 参加者
三、虫送り以外の対策
四、ほうじょう虫
1 粟　2 虫　3 ホージョウの駆除
五、おわりに

一、はじめに

霖雨・旱害とともに、近世凶作の原因となったものに蝗害がある。霖雨と旱害は、それぞれ「日乞い」「雨乞い」を行って、危機を免れようと努力したが、蝗害については、管見の及ぶところ余り知られていない。現代でも地方によっては「火祭り」[1]が行なわれているが、油やその他の農薬の普及したことで、昔の意味の「火祭り」は不要である。そのために、見世物的な面が強調されて、農民の生死にかゝわる気持の「虫送り」行事が失なわれてきたのではあるまいか。「享保十七子（一七三二）秋には、蝗害[2]で田方一粒も実らず前代未聞の凶年也、……九州一統飢餓し、万民途を失ひ左に斃れ右に死す」の惨状であった。この時の代官増田太兵衛[3]は、飢民の救済に努めて一人の餓死者も出さず、恩を感じた民によって、日の隈に神として祀られたと伝えられている。

筆者は、現在の火祭りが虫送りとして定着化することを恐れて、日田地方における生死をかけた虫送りの実態を明らかにする念願であった。しかし、調査にあたって、この調査が

いま五〇年早く、昭和の初めであったらばと何回も痛感した。話者の記憶が薄れていること、体験（見た）のことと、昔の人の話や、さらにそのまた聞きが混同してはいないかと云うこと等もあり、若干の不審は残しながらこの小文をまとめねばならなかった。一つのまとめとしても、資料としてでも、同学の諸先生の参考となることがあれば幸である。

二、虫おくり

1　虫（むし）

回答の大部分は、「さねもり虫」または「虫」としてあったが、ウンカ（中西）、ツマグロウンカ（本城）と答えた例もあった。単に「さねもり虫」「虫」と回答したものには虫を知らない（見ていない）者と、虫は見ていても、[4] 虫の名前を知らぬ者とがあった。

2　虫おくりの呼称

虫おくりの呼び方についても、さまざまであって、

(イ) サネモリ送りと答えたもの（高瀬・山北・堂尾・内河野）

(ロ) サネモリ追い（小畑・求来里・出口・陣屋廻り・高瀬・中城・大野・赤石・柚木・中島）。

(ハ) 虫おくり（本城・林・田島）。

(ニ) 虫追い（山北・山城・内河野）。

(ホ) ゴージンダ追い（中島）。

(ヘ) 呼称不明のもの《用松・馬原（尾戸・金ケ塔・北平・金場・柚の木・帆足・塚田・二串・小竹）、平小野・諸留》。

などがある。

3　虫送りの話者

話者の年齢・地域・[6] 見聞した最後の年代・参加の有無などについてまとめると、つぎのとおりである。

年齢	地域	最後の年	見	聞	参加
七四歳	中島	明治四二年頃		○	
八三〃	山北	大正初め頃			○
九一〃	堂尾	大正初め頃			○
八六〃	諸留	明治末			○
	大野	明治末		○	
	赤石	明治末		○	
	柚木	明治末		○	
	本城	明治三〇年頃		○	
八八〃	金場	明治三〇年頃	○		
八四〃	高瀬	明治三四年頃	○		
八三〃	陣屋廻	明治三一年	○		
八三〃	二串	明治三二年	○		
八六〃	出口	明治二〇年		○	
八七〃	求来里	明治三二年頃	○		
八七〃	帆足	明治三二年頃	○		
	中西	明治二〇年代		○	
	内河野	明治二〇年頃		○	
	小畑	明治三〇年頃	○		
	用松	明治三〇年頃	○		
五〇〃	平小野	昭和一〇年頃			○

4 時刻

暗くなってから（本城・諸留・平小野）、薄暗い頃（馬原・柚ノ木）、闇の晩（中西）、午後七～九時（堂尾）、午後六～七時（中島）、夜（内河野）等の説があったが、要するに夕闇か、暗くなってからの一～二時間位であったらしい。畦道、道路の長短、水田の広狭等の都合があり、一定しないが、深夜に及ぶとか、夜明け前ではなかったらしい。

5 集合・進路・追い落し・追い上げ

村々で相違があり、最後は追い上げか追い落しで決着をつけたようである。

例示すれば、追い落しは

(イ) 求来里村 ― 村の東端の名里（ナザト）部落の眼鏡橋（馬原村との境界）に集合して、着求・平島・下林・坂ノ下・お西の部落順に求来里川の流に沿って西に下り、現大原神社の奥の金昆羅社の東北の台地に炬火を置く。途中は川に追い落しで、最後は台地に追い上げであろうか。

(ロ) 帆足村 ― 光林寺の辺からはじめて、森高等学校の一帯の各地をまわって善妙渕（玖珠川）まで来て、川に炬火を投げ込む時に唱える文句があったかどうかはっきりしない。とにかくこれは、虫を川に追い落したのである。

(ハ) 小野筋の諸村 ― 小野川の上流の上小野から追って来て、それを竹尾村・林村が引きついで下小竹村に送り、下小竹村はさらに下流の河内村に引きついだ。河内村は花月川に追い落したのであろう（筆者）。小野筋では、村から村にと虫おくりを引きついだ点がとくに面白い。なお、梛野（ナギノ）部落には、実盛石という巨石が残っていて、ここで虫追いの引き継ぎが行なわれたらしい。実盛石は道路工事の際に割ってしまって現存してはいない。

(ニ) 陣屋廻り ― 慈眼山の下を通って花月川に架せられた国道二一二号線の橋を渡って少し下流に、古い榎がある。ここに集結して、北西のカネンテ等から一帯の畦道で虫おくりをして、シロバネ（花月の一部、日田林工高等学校下の川岸）に追い落した。

(ホ) 赤石 ― 赤石川沿岸の田の畦を虫おくりして、温所（ヌクトコ）部落の下のサネモリ渕に追い込んだ。

(ヘ) 柚木 ― 「出野では、川で人形を焼いてさねもり追いをした」と『前津江の文化財』に記されているが、虫おくりの最後に、川に追い込んで人形を焼いたのではあるまいか。

(ト) 平小野 ― 氏神菅原神社に参り、炬火を持って畦道を歩いた後、川端でお菓子をもらって解散した。

追い上げに属するものは

(イ) 中西 ― 畦道を虫を追って、最後は山に追いあげた。山の草は赤くなって枯れた。

(ロ) 本城・塚田 ― 下から上に虫追いをして、最後は山（野原）に追い上げた。それで、虫のために野の草が赤く枯れてしまった。

(ハ) 大野 ― 老松天満社でお祓いをし、炬火に火をつけ、さねもりを追いまわし、浦野に追い込んだ。

(ニ) 尾戸（馬原） ― 高い台地であるので、虫送りの開始も終了もこの台地であり、野に追い込んだ。

諸富・帆足村・小野筋の村々・陣屋廻村・赤石・柚木・中西・本城・塚田・大野・尾戸等の川の流れていない村では、山や野に追い上げたのであろう。

径路については、田のくろとか、畦道とだけしか調査でき

なかったものに、内河野・高瀬・用松・小畑・山北等の諸村があるが、これらも川に追い落すか、野山に追いあげるかしたのであろう。ただ、この中で高瀬については、諸家日記[8]に

三日（八月）　晴雨　三ケ村一同虫追、北より来候、宮にて申談今晩相催候、序に（後略 ― 原典句読点なし）

とあるので、西・南・北の三高瀬が合同で虫おくりをして、北高瀬から始めたと思われるが、詳細な道筋や、追い上げ、追い落し等については不明である。

6　炬火

炬火は、虫追いで虫を焼き殺すために、一番大切なものであるが、そのこしらえ方について

(イ)　肥え松[9]に竹や木の柄をつける　（小畑）。
(ロ)　竹を束ねてつくる　（求来里・塚田）。
(ハ)　麦稈を束ねて、竹の柄をすげたもの（帆足）
(ニ)　枯竹を束ねた中に肥え松を入れてこしらえる　（堂尾）。
(ホ)　麻がらを束ねて作る　（中島）。
(ヘ)　作り方不明と答えたもの（金場・金ケ塔・尾戸・小野・港町）。
(ト)　ただ、炬火を作ったと回答したもの（用松・高瀬・大野・赤石・柚木・本城・山北・中西・陣屋廻り・塚田・内河野）。

要するに炬火は、大切なものではあるが、虫送りさえ出来れば、こしらえ方には制限はなかったであろう。ただ、前掲の例では、竹と肥え松が比較的に多いようである。

7　人形

実盛送り、実盛追い等の名があるように、実盛等の人形を作って追ったと思われるが、これにもつぎのような相違がみられる。

(イ)　人形をこしらえた記憶はない　（求来里・帆足・堂尾・中島）。
(ロ)　人形を作ったかどうか不明　（金場・本城・柚ノ木・諸留・平小野・塚田・陣屋廻り・中城）。
(ハ)　人形を作ったとだけ言い伝えられているもの（高瀬A・柚木・大野・赤石・金ケ塔）。

(二) 人形を作った（小畑・山北・中西・林・出口・高瀬B・内河野）。

人形は麦稈でこしらえたり（山北・高瀬B）、藁で作った（中西・小野筋）。人形の大きさは、成人の半分位の大きさ（小畑）か、雀おどし（案山子？）位の大きさであった。また、人形は斉藤別当実盛と手塚太郎光盛の二体であった。（内河野・山北・小野筋）。

人形は、実盛が追われるので、炬火の列の先頭に立ったらしい。内河野の虫送りを例示すれば、人形遣いは三人で、二人目の人が人形を肩車に載せ、先頭の者が人形の足を持ち、三人目の者が後から人形を支える。そのあとから炬火の行列が続く。田の畦道を縦横に通りながら、素人義太夫（水口に高い屋台が造られて、浄瑠璃を語るようになっていた。）の浄瑠璃に合わせて、手塚太郎光盛の人形を持っている側が

「ヤアヤア実盛、逃げるは卑怯、返せ戻せ」

と呼べば、

「ヤアヤア手塚、斉藤実盛これにあり、見事に組んで、生捕り、手柄にせよ」

と実盛側が応答する。逃げる斉藤別当、追う手塚太郎。これに続く火の行列。

山花では、人形はそれぞれ竹竿の先端に付けられて、二つの火の行列の先頭に立ち、時々は双方が落ち合って、人形に格闘の所作を演じさせていたという。

さて、先述の(イ)(ロ)の二項は、人形を否定するようにも考えられるが、この麦藁の人形は大して農家の負担になるものでもないので、たいてい人形はこしらえたものであろうと、筆者には思われる。また、これには、時代の変遷や地域による相違もあるに違いない。

8 鳴りもの

サネモリ虫を、炬火で焼き殺すとともに、太鼓・鉦・鉄砲で大音響を発した。これは虫を音で驚かせて追い払うのではなく、この太鼓・鉄砲等の音の聞えるところでは、虫はすべて死んでしまうと信ぜられていた。虫を殺すための音響である。調査によれば

(イ) 特に鳴り物を持っていたように思えない（求来里・中島・平小野）。

(ロ) 不明（堂尾・高瀬A・陣屋廻り・高瀬B・用松・柚木・大野・赤石・中城・馬原の金場・諸留の諸村）。
(ハ) 三味線（内河野）。
(ニ) 鉦（本城・馬原の尾戸・小畑・山北）。
(ホ) 金だらい？（帆足）。
(ヘ) ブリキ鑵類（中西）。

これら(ニ)(ホ)(ヘ)の中で楽器が明確に残っているのは小畑の例で、仏壇の「鉦」を持ち出して激しく叩いたので、音が出なくなったと伝えられている。

(ト) 太鼓（二串・山北・小畑）
(チ) 割竹ガチガチ（割り竹でガチガチ音を発するように作られたものか）（出口・塚田・中西）。
(リ) 鉄砲（林）。

前述の中で、山北と小畑は鉦と太鼓、中西はブリキと竹ガチガチ、と二種類の用具を使用している。他の村々でも、音を発する用器が一種類であったかどうかは、再考を要する。また、鳴りものは、ただ無やみに高い大きな音を出すこともあったろうが、長い行進であるから、ある調子で鳴らした例もある。内河野の三味線の義太夫節もその一つであるが、山北では太鼓と鉦で

ドンドンカンカン、ドンカンカン
ドドッコ、ドッテンドンカンカン

と打ち鳴らしたそうである。

9　囃し言葉

『日本残酷物語』に「むかし斉藤別当実盛が合戦のとき、稲につまずいて殺されたので、その遺恨によって稲を食いあらす虫となった、という伝説にもとづいていて、この実盛の怨霊を追いはらうためにこうした文句を唱へ（後略 ― ・は筆者）」[10]と、あるように、実盛の怨霊を追い払う文句である。ここでは仮りに囃し言葉としたが、仏菩薩の真言か、念仏のように、この「囃し言葉」で、サネモリ虫を駆除しょうと考えたのである。

全国各地で異同があるようであるが、[11] 日田附近では

(イ) ゴージンダ、ゴージンダ（中島・高瀬・用松・小畑）。
(ロ) ゴージンダ、ゴージンダ、実盛虫ヤゴージンダー（陣屋廻り・帆足・平小野）。

(イ) 全部落一斉に（堂尾）。
(ロ) 三ケ村ぐらい同時にやった　（山北）。
(ハ) 村々が次々に追い落し（虫送り）してゆく（小野川筋）。
(ニ) 不明または他村（部落）は知らない　（残りの村全部）。

であった。

これについて、南高瀬庄屋の日記[13]には

（七月）廿五日　晴天　虫追之義川訳ニ致候而はと、下木平原孫右ヱ門被申出候、早速北ニ申遣候、藤平ニ相渡候、則両年番宮ニ而申談候

とある。文政八年の「虫追い」の実施について、南高瀬（西高瀬兼任）庄屋は、虫追いを川訳（分けカ）にしてはとの申出で、北高瀬庄屋に藤平を遣した上で、北高瀬と南高瀬の両方の年番の者が、宮（天満宮カ）で会談したのである。次に、八月三日の條に

三ケ村一同虫追北より来候。宮ニ而申談今晩相催候

と、三ケ村が北高瀬村からはじめて、三日の夜に虫追いをやった。これは宮での相談で、今晩実施したのだと、隣村と事前に協議して行っている。

また、この類の計画は、安政六年にコレラが流行した際に

(ハ) ゴージンダ、ゴージンダ、実盛追いはゴージンダー（林・小野・帆足）。
(ニ) サネモリ虫はゴージンダー、あとから手塚が追っかけて、アラホーイ、ホイ（山北）。
(ホ) 浄瑠璃・三味線に合わせて「ヤアヤア実盛逃げるは卑怯……」「ヤアヤア手塚、斉藤実盛これにあり……」（内河野）。
(ヘ) 囃し言葉なし（求来里）。
(ト) 不明（その他の村）。

前記の囃し言葉のうちで、サネモリ虫は、斉藤実盛が虫になった伝説にもとづき「ゴージンダは、御陣じゃの意味」[12]であろうと解されている。

10　虫送りの実施

蝗害の発生した際に、虫おくりはどのようにして行なわれたであろうか。隔絶した小盆地等の僅少の例外はあるとしても、一般にどの村でも、大群の虫を追い込まれては困るであろう。調査した中で記すと

もみられる。郡代池田岩之烝は、次の通達を出している。

一、右悪疫請候もの、其儘に差置候而も可助様無之趣、依之品切有之療治方薬方手ニ入候間……

一、前条之通祈祷致したる上ニも、悪病送り致し度村方ハ、送り出し先々隣村障りニ相成不申様、川筋並山手之方之送り出し等申合次第ニ取計、且鐘太鼓其外鳴物勝手次第相用、悪疫受不申様又ハ追払専要ニ心得取計可申候

右之趣得其意村下ニ令受印、早々順達留より可相返もの也

未七月廿八日　日田御役所

これはサネモリ虫ではなく、コレラ（悪疫コロリ）ではあるが、虫送りのように悪疫送りを行う場合の通達である。その要旨は、

1　村方は送り出し先々（送り出された方）の村の迷惑にならぬようにすること。

2　川筋に送り出し、山の手に送り上げの方法等申し合わせてすること。

3　鐘・太鼓其外の鳴物は自由に使用して、悪疫（コレラ）に罹らぬように、追払い（送り）に心がけよ。[14]

また、虫送りには、僧は大般若経を読み、神主は祝詞をあげたと伝えられているが、[16]安政年間、日田郡のコレラ流行の時も

大原社並御城山稲荷社ニおいて、今九日より来る十一日二夜三日流行悪病除御祈執行候間、御村々小前不洩落信心ニ参詣いたし候様御申触可被成候……[15]

未八月九日

の会所の通達や、同十三日の会所通達の[17]

今般流行悪病為郡方安全御祈祷、大原於神宮寺、朝十四日より十五日　……小前一統参　いたし候様、無洩落御申触可被成候

と、虫送りとコレラ祈願（祷）と同様である。これらの例でみても、コレラの場合と同様に、虫送りにも永山布政所や会所からの通達があり、近村の庄屋達の打ち合わせの計画のもとに、虫送りも執り行なわれたのであろう。

明治の中葉以後に、五・六歳で一度だけ虫送りを見た人の、七・八十年後の記憶で、虫送りの村々の間の打ち合わせ等を探ることは無理なことかも知れない。

三、虫追い以外の対策

サネモリ虫の被害はあるが、虫送りの話の伝っていない村がある。これらの村々は、昔から全然行なわなかったのか、或は虫送りは行なっていても、その話が伝わらなかったのか不明である。いま、それらの村々の蝗害対策を述べる。

(イ) 小鹿田（鶴河内村）・東見寺（中島）では、村の山の神の祠に祈願したり、吉竹（中島）の白岩神社に参詣して、その池の水をもらってきて、稲の上に笹の葉でふった。

(ロ) 石松　大原神社の御札（虫札）を受けてきて、田に立てて祈った。

(ハ) 田島　白岩神社（宝珠山駅下車、山の中にあり）の御水を受けて来て、手ダルなどの容器に入れ、量が少ないので水を入れ足して、稲にふった。

四、ほうじょう

1　粟

11　参加者

参加者は炬火を持つ勢子（せこ）の他に、大太鼓を担ぐ者と打つ者、太鼓を叩く者、鉦を叩く者、法螺貝を吹きならす者、人形を持つ者、鉄砲を持つ（放つ）者等が延々と続いたであろうが、その人々には、

(イ) 村中の参加出来るものは全部（一人でも多く）参加した[18]（中島・出口・平小野）。

(ロ) 各戸から一人宛参加した（堂尾・求来里・小畑・林）。

(ハ) 不明（その他の村）。但し、陣屋廻り村では、六〇人位の参加者であったろうとのことである。

これらの人々は、大人（男）が出られぬ時は子供でも出たが、素裸（褌だけ）、伴天だけ、着物の裾をからげた者、脚絆を着けた者、手拭いをかぶったり、鉢巻をしたり、草鞋をはいたり、はかなかったりの雑多な服装であった。

その他、調査によると、多数の女・子供の見物人がいたと思われる。今、調査に応じて語り伝えてくれた人の中の多数は、この見物人か、話を聞いた人々である。

昭和五三年の現在では、粟は稗と同様に、ほとんど食糧として生産される事もなく、ただ小鳥の餌として一部に作られると聞くのであるが、大正の中頃までは、多量の生産があって、農家の主食であった。日田地方は『豊西記』巻頭の日田盆地開闢伝説に、

湖水漸々に流れ、渇して平地となる。而して中に水痕一帯の河を残す。また潟中に三つの岡を現す。乃ち天の三光に擬らゆ、所謂日の隈、月の隈、星の隈（中略）又平原八所にあり

と、その時に出来た牧原、須ノ原、曲桶原等の高原八ケ所を数えているが、その外にも多くの高原があった。これらの台地は、畠として開墾せられ、水田はこれらの台地の間を流れる川の沿岸に発達したにすぎない。もっとも、次第に河水を利用して[19]、水田も次第に拡大して行ったが、畠作の粟は重要な主食であった。

明治一二年の調査[20]で、若干の村を表示すれば、その産額はつぎのとおりである。

(村名)	(米)	(粟)
上野	六九石七斗余	九六石一斗余
夜明	一四九石五斗	七三石
湯山		一八三石五斗
求来里	三八〇石	三〇〇石
鶴河内	一四九石五斗	七三石
女子畑		二八八石四斗

右でわかるように、村々で多量の粟がつくられており、殊に湯山、女子畑は粟だけである。粟がいかに重要な食糧であったか、したがって、その虫害がいかに恐しいものであったかが、充分に理解できるであろう。

2 虫

粟の害虫は、日田では、ホージョウと呼んでおる。求来里村の足立周一氏（明治二六年生）によれば、「蚕の形で黒い虫。昼は地にもぐっていて、夕方涼しい頃に出て来て、粟の葉を食う」虫であり、小畑村原田スエさん（明治一八年生）は「ホージョウは、穂の出る頃に発生して、粟の葉を食ってしまうので粟は穂だけが残って、ぶらぶら揺れていた」と話して呉れた。昆虫採集等の権威、故長金治氏（昨年逝去・八

二歳）は、「裸虫で四七センチぐらい。ヨトー虫（粟よとう虫）で、時々急に発生しては、粟の葉を食うので、穂と幹だけが残る異様な貌になる。成虫は黒っぽい縞のある蛾になる」と教えてくれた。要するに、『大辞典』[21]の

ヨトームシ、夜盗虫、地蚕、夜盗蛾の幼虫。体長幼三六粍、胴脊は暗褐色乃至灰黒色。土中にあり、夜間出て植物の茎葉を食害す。

のことであろう。

3　ホージョウ虫の駆除

虫の退治は、第一に神仏の加護によったのである。

(1)　烏宿信仰（カラトマリシンコウ）、烏宿は『豊後国志』の「烏栖」で、大山荘小切畠（万々金村）の霊山で、女人禁制の山であった。山頂に烏宿権現を祠り、社の少し下に神池があり、清冽の水をたたえている。ここの水を頂いて来て、それを大きな容器の水に入れて、被害の出ている粟に振りかけるのである。これは、現在の津江、大山、天ケ瀬町、日田市求来里、同田島辺まで行なわれていたものである。

(2)　白岩様の信仰　大肥筋中島村吉竹の山中に祀られていて、社の側の池の水を頂いて来て、烏宿（カラトマリ）同様に、被害の粟に振り掛けるのである。大肥筋の他に、有田・小野方面から田島等の参詣者が多い。

(3)　彦山信仰　彦山権現は日田では広く信仰せられて、戸山神社は彦山の神（権現様）を祀っており、彦山の第二代藤山恒雄は、藤山村の狩人であり、財津村の壁野までは彦山の所領であったと言われる程で、その信仰も盛んであった。諸富村を例にすれば、代表のものが参詣して、お水を頂いて帰る（以下、烏宿、白岩と同じ）。堂尾村でも、ホージョウ虫のために、彦山まで詣ったと野上辰蔵氏（明治二一年生）は言っているので、白岩、烏宿信仰圏にも彦山信仰が始まっていたのであろう。

(4)　林村（小野）では、日蓮宗妙栄寺（日田市淡窓一丁目）で祈祷した水を頂いて帰り粟に振った。

(5)　小鹿田（鶴河内村）では、彦山の虫札を請けて帰った。

(6)　中西村では、烏宿の御水の他に、行者をやとって祈願してもらい、田螺をわらで包み、その包みを畑の処々に点々

と立てたそうである。

神仏以外の方法では

(1) 手で虫を殺した（中西・鶴河内）。

(2) 夕方、虫の出る（活動する）頃に、ショーケ（籠）を持っていって、それに何杯も掃き落して、焼き殺した（小畑）。

(3) 日中は粟の根元に隠れているから、それを掘りだして殺した（出口）。

(4) 薬品を使って殺した（中西 ― 昭和六・七年頃より後）。

等の方法がとられている。

五、おわりに

本調査の中で、山北（福岡県浮羽郡）、平小野（下毛郡山国町）、内河野・帆足（玖珠郡）等は、旧日田郡に隣接するか、隣接しないでも、余り遠くない地域であるので、資料が少ないので取り入れた。また、日田郡も成るべく、広範囲にわたるようにした。「豊後国志」による郷荘の区分で

馬原・田島・求来里・湯山は又連郷

北高瀬・南高瀬・西高瀬・上野・小畑・堂尾は石井郷

鶴河内（小鹿田）・二串は渡里郷

中城・用松・財津・藤山・河内・林・小竹・陣屋廻は夜開郷

石松・諸留は有田郷

女子畑・柚ノ木・出口・本城・塚田は五馬荘

万々金・小切畠は大山荘

中島・吉武は大肥庄

大野・赤石・柚木・中西は津江荘

である。

また、〇〇村としてあっても、〇〇村の人に聞いたというだけのことで、その村全体の虫送りが一致していたというのではない。調査に着手した時は、せめて江戸後半の日田の虫送りを明確にしたいと思っていたが、予期したようには行かなかった。しかし、これでも、あと一〇年後であったら、これほども解明出来なかったろうと思う。

今一つ付記しておきたいことは、江戸時代には、本心から米の豊穣を祈っての虫送りであったと思うが、当時の農村としては珍しい行事であって、大勢の子供が参加したり、見物人も出たと思われる。この流れが、見世物的な現在の虫送り

に直結すると思われる。また、不作は、明治頃にあっては、小作人にも地主にも痛手であった。小作人が田に入れる油を地主からもらったのもそのためであり、明治末頃の山北で、小作人は、小作料減免のために、虫おくりをやったとも言われている。

註

(1) 大分合同新聞、昭和五三年八月二八日付け、臼杵石仏で火祭り、毎日新聞、昭和五二年九月九日、臼杵で石仏火祭り等

(2)・(3) 永山布政史料上巻

(4) 羽のある虫と答えたものもあった。

(5) 虫の名に回答なし。

(6) この表の空欄はすべて不明。

(7) 大野・赤石・柚ノ木の三村は『前津江の文化財第一集』昭和五一年刊によった。

(8) 『日田史料第十五回』南高瀬庄屋の日記

(9) 松の切株で油脂の多くてよく燃える部分

(10) 『日本残酷物語巻一』 一一七頁

(11) 右同書 同頁

(12) 柳田国男『実盛考』

(13) 諸家日記 二（前出）九〇頁

(14)・(16) 『日本残酷物語 巻一』

(15) 『日田史料十七回』「御廻状留二」七頁

(17) 同「御廻状留二」 八頁

(18) 一週間も大声で「ゴージンダー……」と叫び歩いて、口がとわばってしまうこともあったと、北口富栄氏（小野村）は言っているので、大勢が動員されたと思われる。

(19) 小ケ瀬井手、大井手等

(20) 「豊後日田郡村誌」

(21) 平凡社・昭和一一年初版